

視覚に障害をもつ子どもが利用しやすく読書に親しむための図書館をめざす取組など

神奈川県 横浜市立盲特別支援学校

基本データ

所在地	横浜市神奈川区松見町 1-26
児童生徒数	107人
教職員数	107人
蔵書数	25,515冊
年間貸出冊数	約2,500冊

テーマ・活動のねらい等

【テーマ】バリアフリーの取組

【活動のねらい】

- 視覚に障害をもつ幼児児童生徒にそれぞれのニーズに応じた蔵書を提供して、読書への意欲を育てる。
- 館内の移動がスムーズに行えるような環境を整備して、読みたい本を自分で探せるようにする。

取組・活動の概要

【対象学年】

- 幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科・高等部専攻科、教育相談対象児・通級学級児童生徒

【対象授業】全教科

【頻度・時期】通年

【バリアフリーの取組の概要】

(1) 図書館用音声対応ソフト

- 図書館入ってすぐのカウンターでは、音声対応で貸出・返却ができる。生徒の個人カード・蔵書管理をバーコードで行っている。使用しているソフトは「図書館情報BOX」。幼児児童生徒・教職員・希望する保護者には個人カードを発行している。(写真 左のカード) カウンターに固定してあるシートをバーコードリーダーで読み取り、蔵書に貼ってあるバーコードを読み取ることで、返却・貸出の手続きをすることができる。



図書館用音声対応ソフト（図書館情報BOX）

(2) 館内の移動をスムーズにするための工夫

①床ライン

- 技能員の協力で、館内移動を助けるための床ラインを設置した。



書架へ誘導するライン

②書架マーク

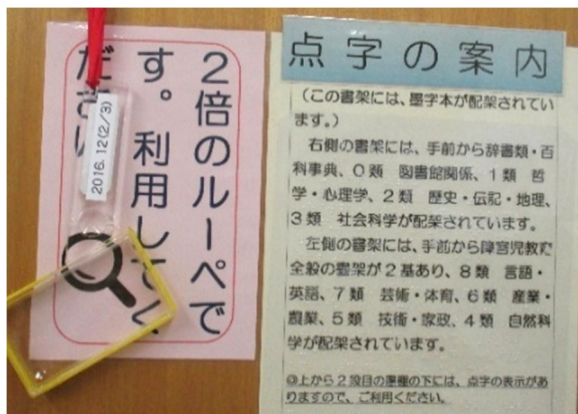
- ボランティアの協力で、書架マークを設置した。書架には触って分かるマークをつけている。マークは、児童生徒が誰でも知っているキャラクターを生徒図書委員会で話し合っ選り、手で読む絵本のボランティアグループに作成を依頼した。



書架マーク

③書架の表示

- 点字を使っている児童生徒には、配置を言葉で説明しなくてはならない。印刷した文字の上に点字シールを貼っている。また、表示や蔵書のタイトルを探すためのルーペを書架につけている。
- 点字の書架には、本を探す際の手がかりとなる著者名を記したカード(点字シールつき)を貼っているほか、棚にシリーズ名を書いた点字シールを貼っている。点字の蔵書だけでなく、CDケースにもタイトルを点字テープで貼っている。



点字シールを貼った点字の案内とルーペ

(3) 視覚を補うために機器を活用

- 視覚に合わせて見たい大きさに拡大して読むことができる「拡大読書器」、拡大と音声の両方で読書を楽しむことができる「マルチメディアデージー専用パソコン」、閲覧席で自分で操作することのできる「デージー再生機」を設置している。

取組・活動の工夫や特徴

【取組にあたって】

- 視覚に障害をもつ幼児児童生徒は、読書に興味をもってネット・書店・公共図書館で自由に図書を選び読書をする経験をするのが難しい。
- 本校の図書館では多くのボランティアの協力を支えられて、点字・拡大・音声とリライトの蔵書を作製して、「本を読みたい」という希望に応える工夫をしている。
- また、読書には「心を育てる」という役割もあるが、そのためには「自分で本を探す」という

経験が重要だと考えている。勧められた本を読むだけでなく、自分でどんな本を選び読んだのか、その本は自分にどんな影響を与えてくれたのか、「心に残る本に出会う」一人ひとりの読書体験を大切にしたい。

- そこで、本校では館内の移動を助け、貸出・返却も一人で行えるような配慮をしてきた。このような取組の積み重ねがあり、校内読書コンクール「本はともだちコンクール」には毎年多くの作品が集まっている。

【具体的な取組について】

- 新着任の教職員への図書館ガイダンスを4月に実施、本校の図書館の概要や特色を説明する。
- 図書館ボランティアとの懇談会を年間1回実施、学校図書館への理解と協力をお願いしている。
- 文化祭ではボランティアの協力も得て、参観者への図書館公開を行っている。
- 館内移動のための手がかりについては、視覚に障害をもつ教職員の意見を取り入れた。
- 館内移動を助けるための床のライン設置や書架の表示は取り組みやすいと思う。指導者が視覚に障害をもつ幼児児童生徒に読書の楽しみを伝えるために、どのようなメディアがあるのかわからないこともあると思う。近隣の視覚(盲)特別支援学校に相談することを勧めたい。
- 毎月「図書館だより」を発行して、新着図書などを知らせている。

取組・活動の成果や今後の展望

- 本の配置が分かりやすくなり、読みたい本が探しやすくなって、生徒だけで図書館を利用する機会が増えている。
- 校内読書コンクールへの参加作品数が増加している。
- 館内のスペースに限りがあり、新しい蔵書を受け入れるために、蔵書の廃棄を進める必要がある。
- 多くのボランティアに支えられているので、今後も支援していただけるようにしたい。